

日本常民文化研究所展示室 収蔵資料「小絵馬」

期間：2018年3月28日（水）～10月4日（木）

会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 神奈川大学日本常民文化研究所展示室

祈りの小絵馬

加藤 友子

絵馬とは、祈願や感謝の目的で神社や寺に奉納する板絵のことである。古くから「馬は神の乗りもの」として神は馬に乗って人の世に降臨するものと考えられてきた。そのため、祈願の際に生きた馬が奉納される一方で、経済的理由から土の馬や・木の馬・藁の馬も奉納されるようになる。さらに立体の馬から、平面的な馬へと変化し、板に馬の絵を描いて奉納する現代のような形の絵馬が奈良時代後半に登場する。このような絵馬をその性質や形状から分類すると、神社の拝殿などにあげられる大きな扁額形式の「大絵馬」と吊り掛け形式の小型の「小絵馬」に分けられる。

大絵馬は、室町時代中期になると、専門画家はもとより著名画家が筆をとり、画題も馬以外のものが登場し、形状・仕様も多種多様となっていく。さらに桃山時代では、上級武士や貿易商人らが多くの豪華絢爛な絵馬を奉納し、絵馬を掲げる絵馬堂が建てられる。この絵馬堂は画廊や博物館の役割を果たし、絵馬が美術的な価値を得るようになっていった。



写真1 展示風景



写真2 船絵馬（模造品）幕末から明治時代にかけて活躍した船絵馬師「絵馬藤」の作風をまねている。船体や帆装、艀装の描写は奉納年代に即しているが、細部の表現や色使いを実物とは違っている。シルクスクリーン印刷で、愛好者向けに製作されたと考えられる。

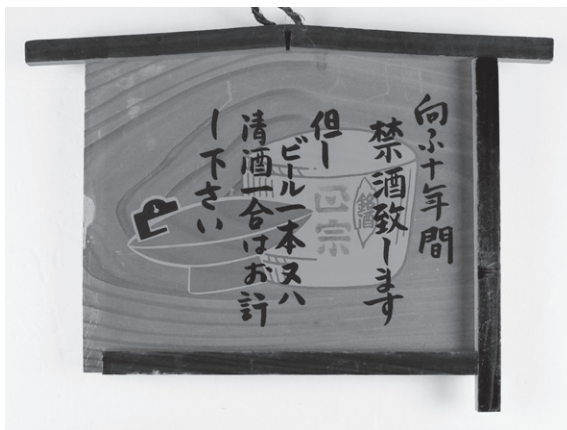


写真3 杯に錠（禁酒）



写真4 違い大根（夫婦和合・子孫繁栄）

その一方、庶民のあいだでは、心のうちに秘めた願いや悩みを絵馬をとおして神に訴え、解きほぐしてもらうための「小絵馬」が生まれる。その図柄は庶民の悩みの数だけあるといわれ、江戸時代の文化・文政期に小絵馬はもっとも多彩になっていく。願い事を図柄で記した小絵馬は、名前を記さずに干支と性別のみで神に願いを届け、神とのコミュニケーションのツールとして成り立っていた。現代では世相を反映させた合格祈願絵馬が登場するなど、小絵馬は庶民のくらしや信仰を物語る重要な存在といえるだろう。

今回の展示では、この小絵馬を約2,000点におよぶ「羽田勇人 小絵馬コレクション」よりご紹介した。羽田氏は、絵馬研究で著名な岩井宏實氏の指導も受けて、昭和30年代頃より、干支・祭礼・願掛けなどさまざまな種類の小絵馬を収集された。主な展示品は、企画展の和船展示に関連した航海安全や大漁祈願の「船絵馬」や庶民の願いを図柄で示した小絵馬である。「ピンと心に錠前かけりゃ、いかな錠でもあきはせぬ」という狂歌の流行から禁ずる対象に錠前をかける「錠前絵馬」が普及し、禁酒なら杯や酒樽、禁賭ならサイコロや花札といった図柄が描かれた。また、夫婦和合や子授けの祈願の「違い大根」、体の治癒や美しさを願うための「手」「蛸」「蟹」「鯰」や「へちま水」の図柄など、庶民の多様な願いを垣間見られる展示として構成された。